

北海道に伝わる明治期制作の山口県改良鱧縄船雛形

清水満幸

1 市立函館博物館に保管されている「漁船模型」資料

かれこれ15年程前、山口県史編纂室において、興味深い漁船の雛形が市立函館博物館に収蔵されているという調査情報を得た。

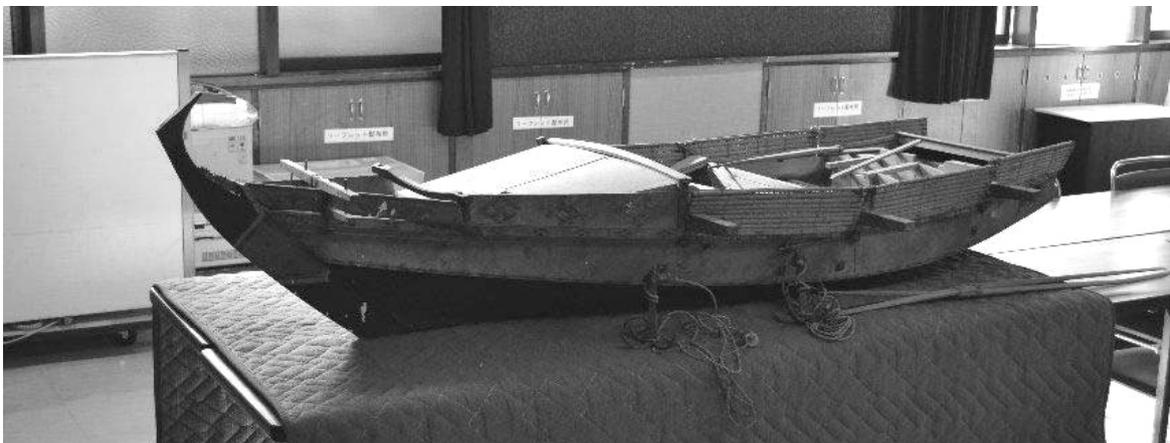
メモ写真を見ての第一印象は、明治期に優良漁船として全国に紹介された「山口県改良鱧縄船」に形状が良く似ているな、というものであった。「山口県改良鱧縄船」は、山口県萩市の玉江浦や鶴江浦において江戸時代から逐次改良が加えられてきた漁船で、鱧を漁獲してフカヒレ（鱧鰭）を生産するための鱧延縄漁に用いられてきた。

現在、この「山口県改良鱧縄船」については、わずかに船の図面や写真が確認されている程度で、船そのものは存在しない。萩地域に深いかかわりのある漁船ということで、かねてより、資料の掘起しを願っていたものである。

「山口県改良鱧縄船」の特徴は、漁船の舳部分（船首部分）や胴（船体中央部）、艫（船尾部分）など主要部分に甲板を張り、舷側を越えた海水が船内に溜まらないような工夫が施されていることであった。甲板と戸立（舷側板や船底材を固定して補強する構造材で、船内を仕切る板材）とによって、いわゆる空気室が船内に確保され、従来の甲板を設けていない漁船に比べると、はるかに安全性の高い漁船となっていた。

数年前、念願かなってこの漁船雛形を、市立函館博物館において実見調査する機会を得た。函館博物館における資料名は「漁船模型」。全長は約212cm、船体幅が約55cm、高さが約50cmで、木造のかなり大型の資料であった。

市立函館博物館によると、当該「漁船模型」は、博物館に収蔵されるまでに幾度か所管



市立函館博物館に保管されている「漁船模型」

や保管場所が変わったために、残念ながら来歴などの資料情報が不明になっているとのことであった。しかしながら、「漁船模型」を実見すると、西日本の漁業者の間で「長靴を履いた足を投げ出したような」と表現された「山口県改良鱸縄船」の舳の形状や、一部の部品が欠損しているものの、甲板を張った特徴のある船体構造を確認することができた。

さらに細部を検討すると、付属資料として、船を推進させる船具である櫓（櫓）が3丁添えられていた。その櫓の形状は、山口県の日本海沿岸地域で特徴的に用いられるナガウデロ（長腕櫓、後述）に分類できるものであった。そして船尾の右舷側に、櫓を操作する設えを確認できた。

このことにより筆者は、この「漁船模型」は、山口県において制作された「山口県改良鱸縄船」の雛形の可能性があるとの判断を下した。

以下では、まず「漁船模型」を山口県の漁船と判断する上で指標とした山口県下の櫓の特徴について述べる。さらに、明治期の博覧会記録などをもとに、この「漁船模型」の制作者や制作年を絞り込み、加えて北海道に当該漁船雛形がもたらされた理由についての若干の推察を述べたい。



萩市玉江浦の和船競漕、長腕櫓を櫓の右舷側で操作



明治期撮影と考えられる萩市鶴江浦の漁船

2 山口県日本海沿岸において用いられてきた櫓・ナガウデロ（長腕櫓）

2.1 山口県で用いられる二種類の櫓

山口県内で用いられてきた櫓は、二材を継いだものとなっており一般的に継櫓に分類される。二材とは、船上で操作する人が握って押したり引いたりする櫓腕と呼ばれる材と、水中にあって揚力を発生させるハ（羽）とかアシ（脚）と呼ばれる材のことで、これが楔や締綱を用いて接合固定される。

櫓を用いる船においては、櫓（船尾）の床や梁に櫓を支える支点である杭が設けられる。一般的にログイ（櫓杭）と呼ばれるが、この櫓杭を嵌め受ける櫓杭受けの部材が櫓の本体に設けられる。これは、一般的にイレコとかロベソと呼ばれる。櫓杭に櫓杭受けを嵌めこみ、櫓腕を操作することで船を推進させる。

山口県下の櫓の形状に注目すると、用いられる櫓は2種類に分類できる。

一つは、櫓腕の幅が比較的細くて長く、櫓杭受けは四角く小型で櫓腕と櫓羽の接合部分に設けられるという特徴を持つ。

今一つは、櫓腕が楽器の琵琶のような形状で比較的平たく、また、櫓腕と櫓羽が角度を持って接合されており、板蒲鉾状の厚みのある櫓杭受けが櫓羽に設けられるという特徴をもつ。

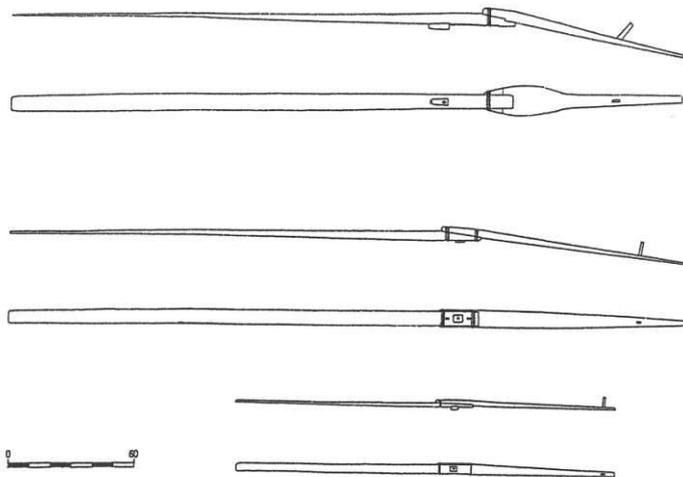


図1：平腕櫓と長腕櫓の略図

2.2 ナガウデロ（長腕櫓）

櫓腕の幅が比較的細くて長く、腕羽との接合部に四角い小型の櫓杭受けが設けられる櫓を、便宜的に長腕櫓と呼ぶ。その長腕櫓の使用状況についてまとめたものが、以下の図2である。後に示す図3、及び図4を含め、これらは筆者の現地調査による。

なお、図2と図3の「現在使用（少数）」の項目は、長腕櫓と平腕櫓の両方を用いている地区で、片方の形状の櫓の使用がごく少ない状況にあることを示す。櫓屋（櫓・櫓専門に製作する技術者や商店）の商圏拡大や櫓を製作できる船大工の減少により、用いる櫓の形状が変わってきた、または変わっていく可能性があることを指摘できる。

長腕櫓については、特に呼び名がないとする所が少なくないが、ナガウデ、ホソウデ、カクロ、マルウデ、マルロなどと呼ばれる所もある。櫓腕の形状については、角材の角を落としたようなものや、腕断面が板蒲鉾のようなものが見られ、それが呼称に反映している。

長腕櫓については、山口県の日本海沿岸を中心に、島根県の島根半島西半から、関門地域や壱岐の一部においての使用が認められる。

これらの地域では、専ら長腕櫓を用いるとする地区が少なくない。後述する櫓腕の形状が平たいいわゆる平腕櫓を共用する地区もある。この平腕櫓については後に導入されたという伝承や、共用で複数の櫓を用いる場合でも櫓は長腕櫓を用いるという伝承を、萩市域や旧大津郡油谷町、旧豊浦郡豊北町などで聞くことができた。櫓に長腕櫓を用いる理

由については、長腕櫓が丈夫で波に対して強いからとか、舵として機能させるのに適しており重要であるからと説明される。

これらの伝承や、長腕櫓を単に口と呼び、特別な名称がないとすることを考え合わせると、山口県の日本海側を中心とした日本海西部地域においては、長腕櫓が一般的に用いられてきた櫓であった可能性を指摘することができる。

山口県の響灘沿岸地域では、現在、平腕櫓の使用が優勢になってきており、長腕櫓が次第に使用されなくなっている。

2.3 ヒラウデロ（平腕櫓）

櫓腕が楽器の琵琶のような形状で幅がある櫓を、便宜的に平腕櫓と呼ぶ。この櫓は、櫓腕の形状からビワロとかヒラロとも呼ばれ、櫓腕と櫓羽とが角度を持たせて接合され、櫓羽に蒲鉾状断面の高い（厚みのある）櫓受け材が設けられる。

その平腕櫓の使用状況についてまとめたのが以下の図3である。

平腕櫓は、山口県の瀬戸内海沿岸や響灘沿岸、福岡県、佐賀県、長崎県、大分県で一般的に用いられていることを確認することができる。平腕櫓でも特に腕の幅の広いものの使用が、瀬戸内海沿岸地域や山口県の響灘沿岸地域において認められた。

山口県の日本海沿岸地域においては、かつて長腕櫓と平腕櫓とを共に使用したとする地区が少なからず存在する。ただしそれらの地区では、平腕櫓を過去に使用したということ、現在は使用しないとする所がほとんどであった。そのような地区では、長腕櫓を口と呼び、平腕櫓をビワロと呼ぶ所が多い。大敷網の網船や曳き網船など大型の和船が無くなったため、平腕櫓を使用しなくなったという。

2.4 艫櫓の位置

船の船尾である艫で操作する櫓のことを艫櫓と呼ぶ。艫櫓は、船の左舷側か右舷側かどちらかの舷で操作する。

この艫櫓の位置に注目して記録を進め、得られた成果をまとめたものが以下の図4である。調査で見聞きした限りでは、艫櫓の位置が両舷混在していて不定という所はほとんど無かった。

艫櫓を右舷側で操作するのは、島根県西部から山口県の日本海沿岸地域、関門地区や壱岐の一部においてであった。

逆に艫櫓を左舷側で操作するのは、山口県の瀬戸内海沿岸、響灘沿岸、大分県や福岡県、島根県の東部においてであった。

艫櫓の位置については、昔からそうであったと説明されることが多く、どちらかの舷が選択される理由は確かには伝承されていない。櫓を製作する各地の船大工職人（防府市、下関市）においても、艫櫓の位置が異なる地区が存在することは承知しているが、その理由については関知していないという。

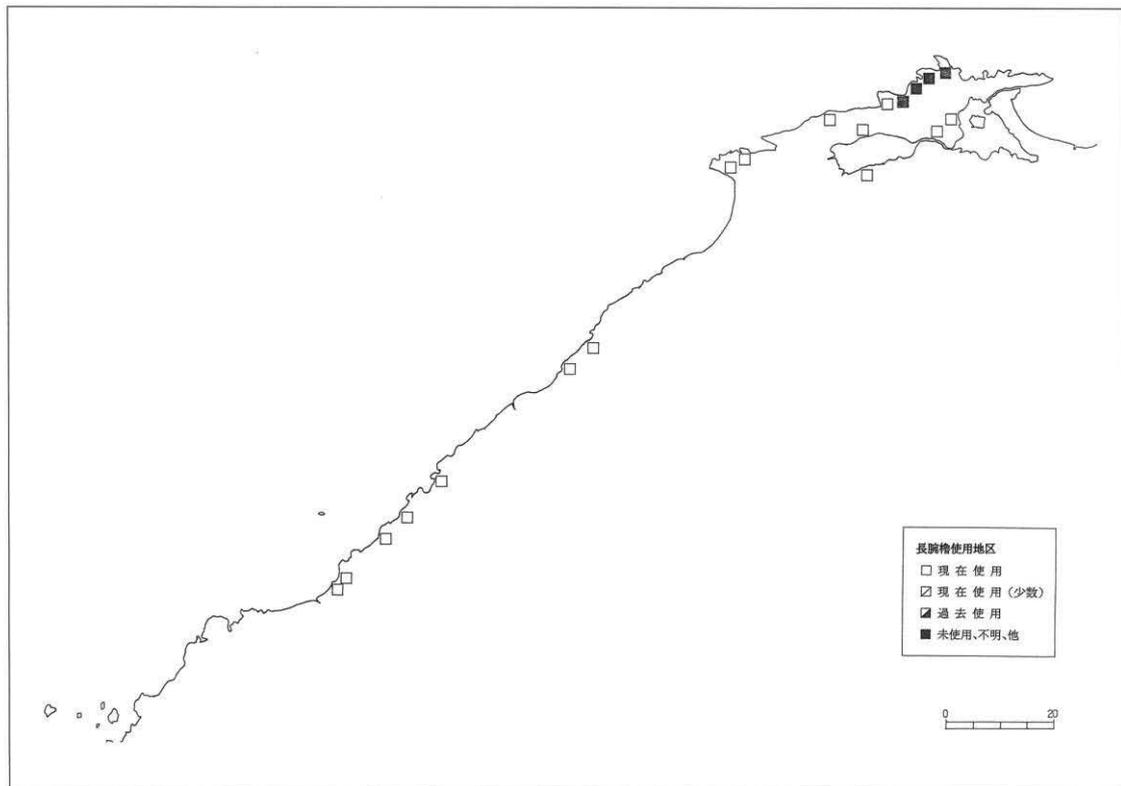
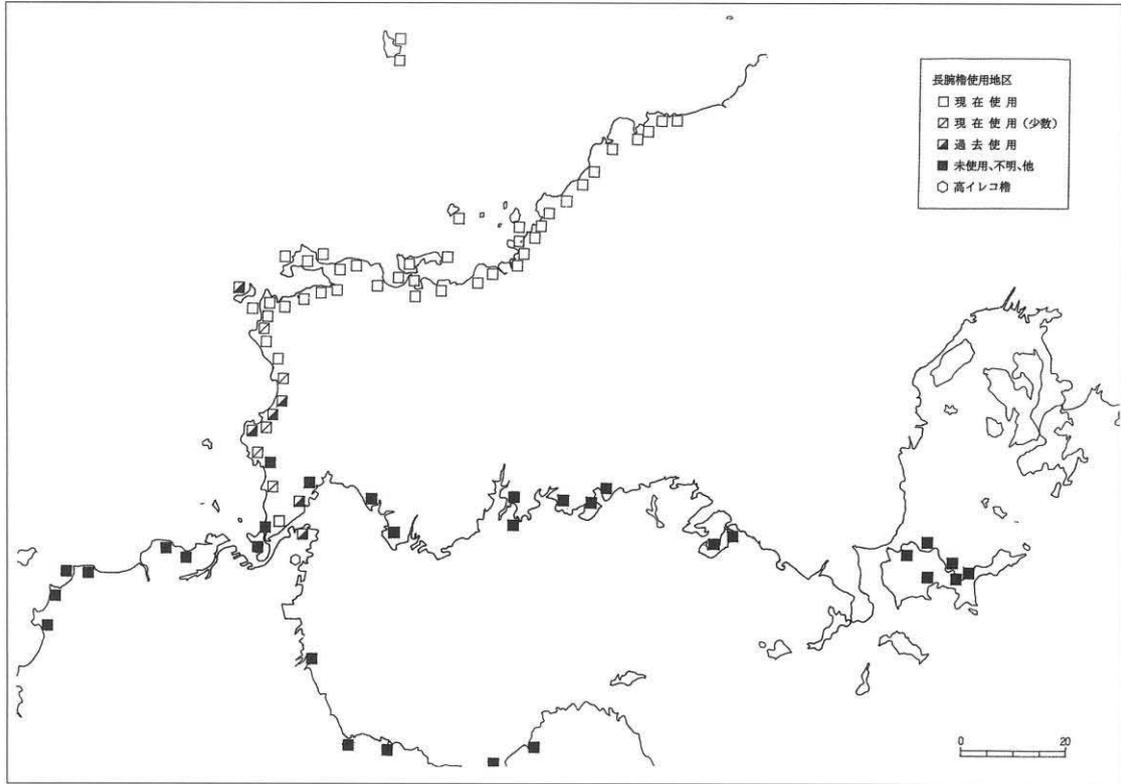


図2：長腕櫓の使用状況

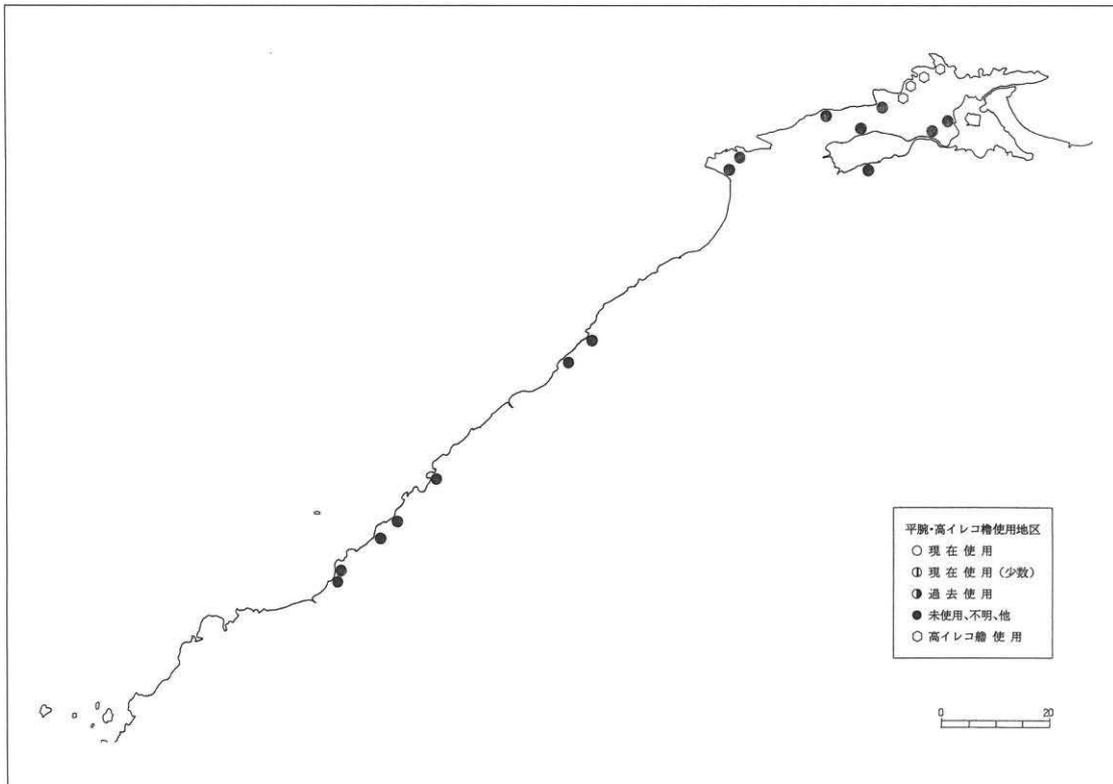
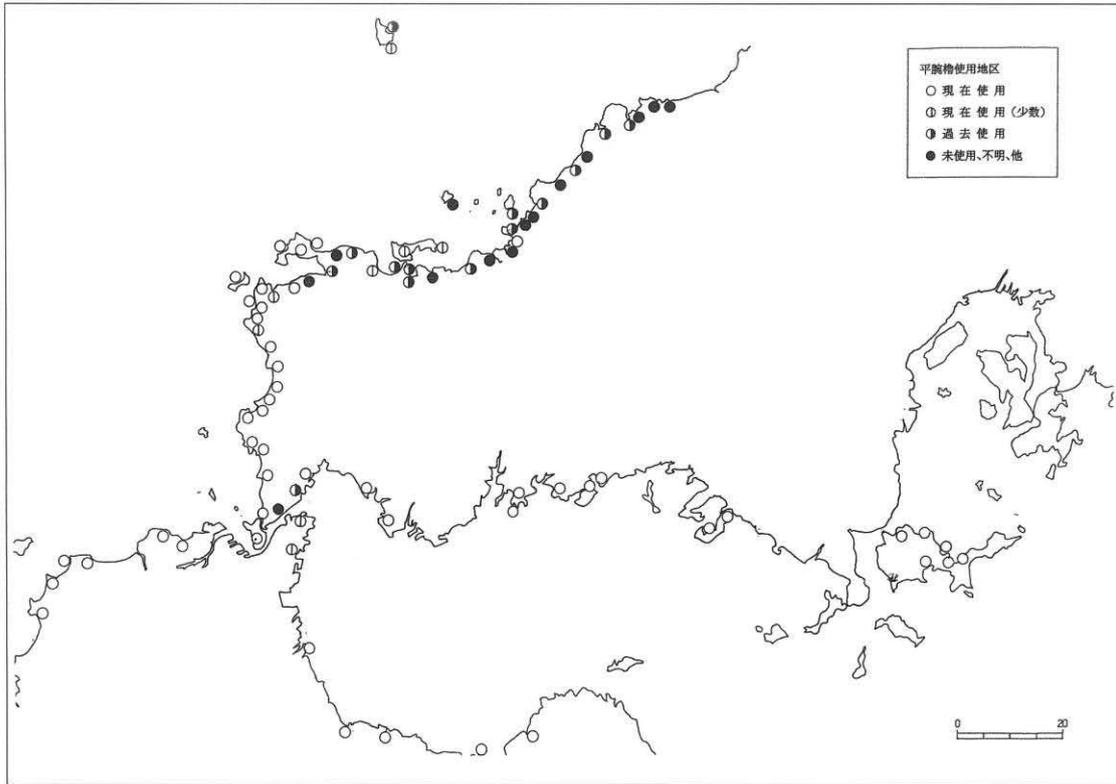


図3：平腕櫓の使用状況

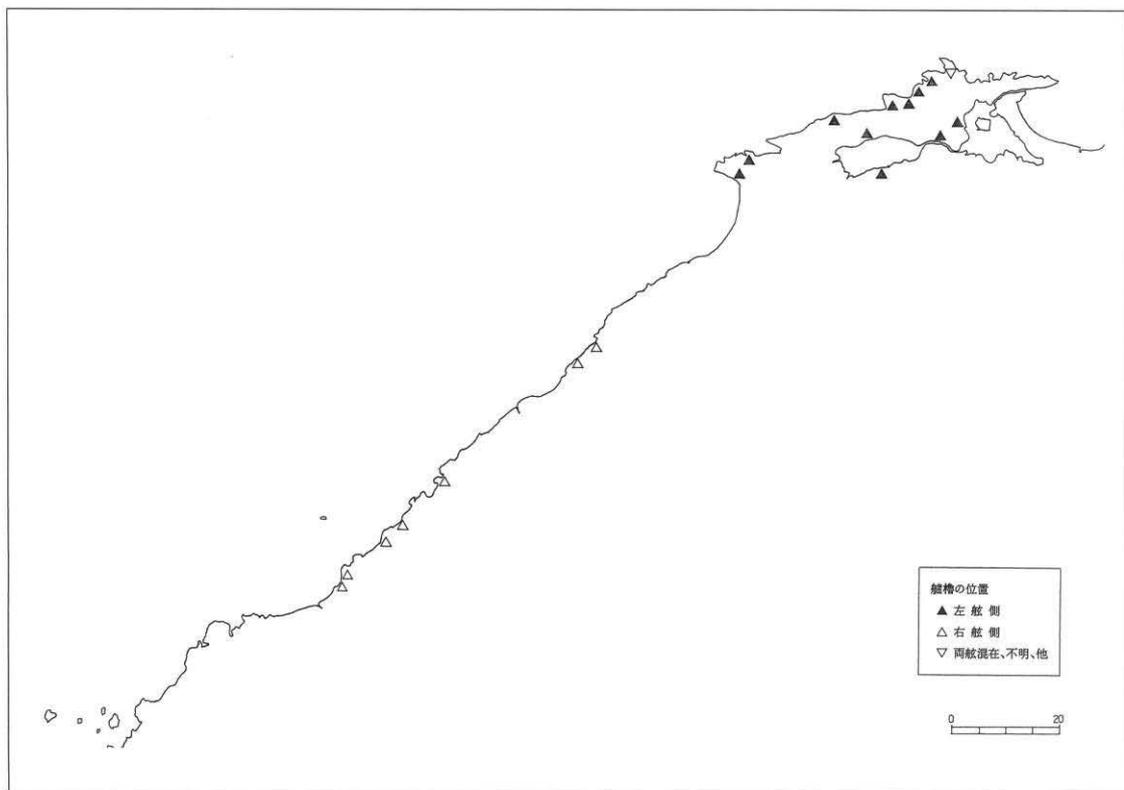
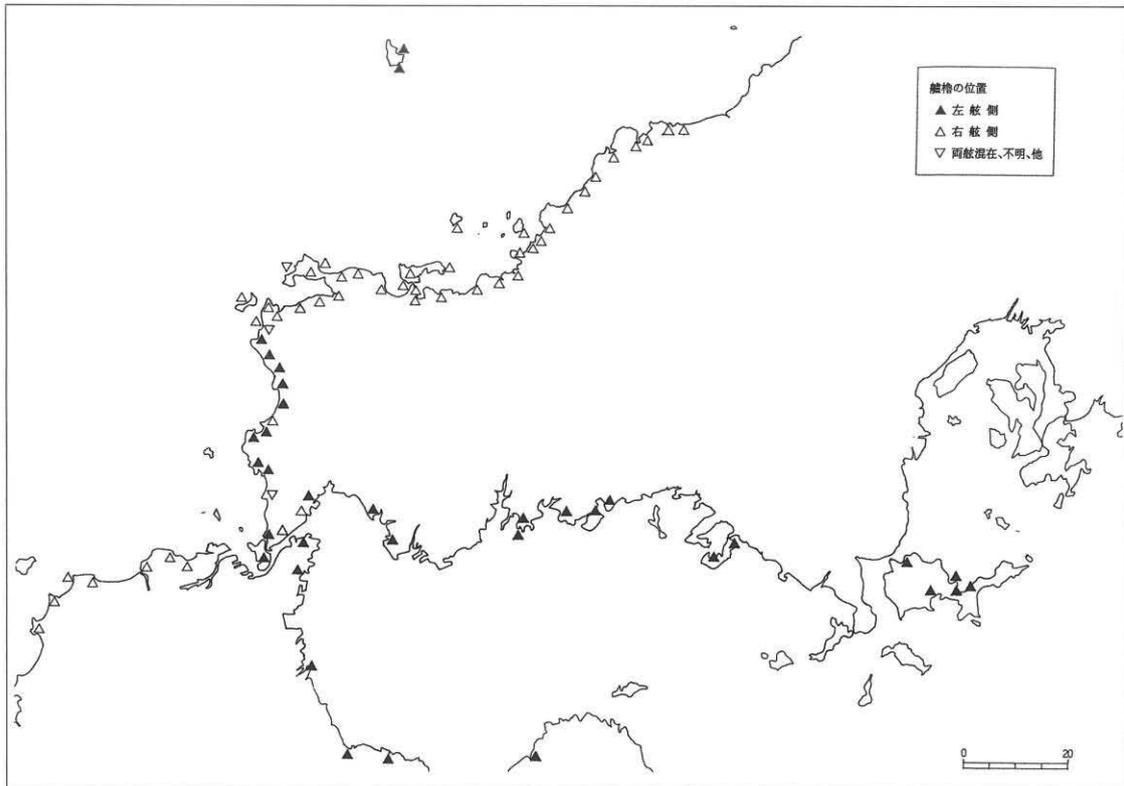


図4：船體の位置

2.5 調査によって見えてきたこと

山口県で用いられてきた櫓について、これまでの調査で見えてきたことをまとめると、以下のようなことになる。

- ① 長腕櫓については、島根半島西半から、山口県日本海側、関門地域や壱岐の一部にかけての地域で用いられてきた
- ② 長腕櫓を用いている地域においては、平腕櫓をヒラウデロとかビワロと呼ぶのに対して、長腕櫓の呼称は特に無いとする地区が多い。つまり長腕櫓が一般的に用いられる櫓であったと推察される。
- ③ 平腕櫓については、瀬戸内海沿岸地域や北九州・福岡地域で一般的に用いられる櫓であったと推察される。それらの地域では、長腕櫓の使用が認められないし、伝承においても以前から用いられていない。
- ④ 櫓については、島根県西部から山口県日本海沿岸地域、関門地域や壱岐の一部において右舷側で操作する。
- ⑤ 他の地域では一般的に左舷側で櫓を操作する。

以上のことを総合すると

- ⑥ 長腕櫓を櫓の右舷側で操作する漁船は、ある程度限定された地域、つまり島根県西部から山口県日本海側地域、そして一部ではあるが関門地域や壱岐で造られた可能性が大変に高い。

水産博覧会や内国勸業博覧会の記録によると、明治16年(1883)に開催された水産博覧会において、山口県より鱧延縄漁船雛形が出品されて「非常ナル賞賛ヲ博シ」、その後各地でこの漁船を模範に漁船改良が進められたとされる。

また、山口県日本海側同様に長腕櫓を櫓の右舷側で操作する島根県において、明治26年(1893)に、「改良漁船」の導入を企図したことを示す資料も伝わっている。それらのことと櫓の調査成果を考え合わせると、市立函館博物館に保管されている長腕櫓を櫓の右舷側で操作する「漁船模型」は、山口県の日本海側において建造された「山口県改良鱧延縄船」の雛形である可能性が見えてくる。

3 「漁船模型」の制作年代

市立函館博物館は、昭和41年(1966)4月の開館で、明治12年(1879)開館の「開拓使函館仮博物場」や、明治24年(1891)7月に開設された「水産陳列場」において集積された資料の一部が引き継がれているとされる。当該「漁船模型」資料は、その内の一つである可能性が高いとのことであった。

「漁船模型」調査後しばらくして、市立函館博物館より、保管されている明治期の「水産陳列場物品目録」の中に、「改良漁船雛形」、「山口県」、「原田儀三郎」の記載が認められたという連絡が、目録のデータとともにもたらされた。

目録を確認すると確かに、明治23年(1890)12月の「水産陳列場物品目録」「漁撈

の部」の各種漁具の中に、「改良漁船 壱ヶ 山口県 原田儀三郎」の記載があり、水産陳列場が開設される前年の段階で、既に「改良漁船」が存在していたことが分かる。

続いて「水産陳列場重要書類」の「函館水産陳列場 第壱館 第弐館 陳列之保存品調」には、「北水協會出品之部」の1276点の品名の中に、「改良漁船雛形 付属品トモ 壱艘」の記載が認められた。この目録については、明治39年（1908）に「水産陳列場」の備品類を北海道庁に引継ぐにあたって作成された旨の書付けが認められる。

作成年の異なる両目録に記載された「改良漁船」が、同一のものでない可能性は否定できない。しかし他に6点、名称などから同じ資料と考えられる漁船雛形資料が、それぞれの目録に記載されており、また漁具においても両目録に記載されているものが少なからず存在する。従って、現在伝えられている「漁船模型」は、「原田儀三郎」により出品された「付属品」の櫓を伴う「改良漁船雛形」の可能性が少なくないと考えられる。

このような考え方に立つと、「漁船模型」は、水産陳列場の目録が整備される明治23年12月以前に函館にもたらされていたということになる。

そこで注目されるのが、明治期に開催された各種博覧会や共進会である。その一つ、殖産興業を目的とした内国勸業博覧会は、明治10年（1877）より都合5回にわたり開催されている。その第3回目である「第三回内国勸業博覧会」は、明治23年（1890）4月から7月にかけて東京上野において開催され、この回より初めて水産部門が設置されている。

実は、この「第三回内国勸業博覧会」に、「山口県阿武郡山田村」「原田儀三郎」は「鱧縄漁船雛形」を出品しており、これが「二等進歩賞」を受賞しているのである（第三回内国勸業博覧会事務局 1890）。

先述した「水産陳列場重要書類」の中の「第一類漁具及其付属具并其使用方法及模型」目録には、水産陳列場に陳列収蔵された一部資料の沿革として、「第三回内國勸業博覧會ニ於テ購入シタルモノニシテ明治二十四年七月北水協會ヨリ出品ニ付之レヲ陳列セシム」との記述が見える。

残念ながら、目録に「漁船模型」の沿革についての記述は見出せないが、「第三回内国勸業博覧会」に「原田儀三郎」が出品した「鱧縄漁船雛形」が函館にもたらされ、それが現在に伝えられている可能性を指摘することができるのではなかろうか。

それではなぜ、函館に「鱧縄漁船」つまり「山口県改良鱧縄船」の雛形がもたらされたのであろうか。

4 「漁船模型」がもたらされた背景

明治19年（1886）に編纂が開始された『日本水産捕採誌』には、山口県の旧阿武郡山田村（現萩市）玉江浦や旧阿武郡椿郷東分村（現萩市）鶴江浦において伝統的に行われていた鱧延縄漁について、以下の記述がある。

（鱧）底延縄に至りては、豊後国佐賀関、長門国玉江浦、鶴江浦漁民の特技にして近來其々の地方に於て該地より教師を聘し伝習せるものありと雖も未だ各地に遍ねからず

蓋し底延縄にて釣るべき鮫は体軀殊に巨大にして勢ひ猛烈なるのみならず栖息する所遠海の深底に在るが故に最も勇敢なる漁者にあらざれば出漁に惶るを以てなり（農商務省水産局（編）1911：332-333）

『日本水産捕採誌』は、当時の農商務省水産局において編纂が進められたもので、近世以来の漁具・漁法を、全国規模で調査し集大成したものである。漁具・漁法をあらかじめ体系的に分類・整理して全国的に俯瞰し、各地のそれらを事例として紹介している。

巻頭序文には、「全国の漁具・漁法の異同優劣を知り以て之が改良を図るの参考と為すを得べきなり」とあり（同：3-4）、水産業の近代化に資する資料として編むことを謳っている。

その中での上記記述であり、玉江浦や鶴江浦が、鱻延縄漁の先進地として全国的に認識されていたことがうかがわれ興味深い。

そのような背景のもと、くだんの「漁船模型」つまり「山口県改良鱻縄漁船」の雛形は制作され、函館にもたらされたと考えられるのである。

ちなみに、明治28年（1895）に開催された第四回内国勸業博覧会において、「山口県阿武郡山田村 玉江浦漁業総代」から「遠洋漁業成績」が出品され、これが水産部門の最高賞である「名誉賞」を受賞している（第四回内国勸業博覧会事務局 1895a）。

『第四回内国勸業博覧会第四部審査報告』には、玉江浦において江戸時代の文化年間より遠洋出漁を開始し、天保元年（1830）には対馬近海にまで漁場を拡大して、さらに暴風に遭遇して朝鮮国慶尚道絶影島近海に漂流したことで朝鮮半島近海の漁場を見出し、以来、いわゆる韓海において鱻漁に従事し漁利を得てきたことが記されている（第四回内国勸業博覧会事務局 1896）。

そして、日本近海の漁場狭隘化が進む中でいち早く遠洋出漁に取り組み、漁船の改良を進めつつ一致団結して漁獲をあげてきた玉江浦の漁業者が激賞されており、背景に、日本の漁業者を韓海など遠洋に誘おうとする国の方針が垣間見える。

この第四回内国勸業博覧会においては、山口県阿武郡萩町や同山田村から出品された鱻鱮や、阿武郡椿郷東分村から出品された漁船雛形が高く評価され賞を授けられている（第四回内国勸業博覧会事務局 1895a）。

先に挙げた『第四回内国勸業博覧会第四部審査報告』には、鱻鱮について、清国貿易が開始されるまでは国内でも注目されず生産がなされなかったことや、近年になって各地で鱻鱮生産のために鱻漁を開始するようになったこと、また、大阪市場において山口県萩地域の鱻鱮の品質が佳良と評価されていることが報告されている（第四回内国勸業博覧会事務局 1896）。

これに続いて明治30年（1897）に開催された第2回水産博覧会においては、総出品数46,248点のうち18点のみの「名誉銀牌（賞）」を、阿武郡椿郷東分村の鶴江浦漁業者出品の「遠洋漁業成績、鱻縄漁船」が受賞している（第二回水産博覧会事務局 1898）。また、阿武郡山田村の原田儀三郎出品の「鱻縄漁船」が進歩二等（賞）を受賞し、萩地域からの

漁具や水産加工品出品者多数が褒状を授与されている。

前述したように、内国勸業博覧会や水産博覧会においては、山口県萩地域漁業者が遠洋へ鱧延縄漁で出漁した記録や、韓海など遠洋への航海や操業に用いる改良漁船、さらには鱧延縄漁により生産された鱧鱈が、大変に高い評価を得ている。そこには、日本国政府の水産業振興方針との合致があったことがうかがえる。

つまり、函館に「山口県改良鱧縄船」の雛形がもたらされた背景には、先進の技術を導入して北海道の漁場開拓を進め、そこで鱧鱈などの清国輸出品を増産するという目論みがあったことを推察できるのである。

5 まとめ

上記のような見方に立つと、明治25年(1902)に開催された「北海道物産共進会」を総括した『北海道物産共進会報告』の記述は大変興味深い(北海道庁1892)。この資料によると、北海道沿岸にはアオザメが多数棲息しているが、これを漁獲利用しないのは非常な「敗利」であるとしている。そして最近ようやく漁獲するようにはなったが、北海道物産共進会出品の鱧鱈生産技術には難があると指摘している。

ちなみに、北海道大学水産科学館には、明治期の山口県鱧延縄漁具が収蔵されている。小樽市において明治41年(1908)に開催された北海道水産共進会に出品されたものである。北海道において、明治20年代以降も継続して、鱧延縄漁業に取り組もうとしていたことがうかがえる。

これらの資料や上述したことから導き出せるのは、明治20年代に、盛んに北海道の漁場開拓と先進漁法の導入が進められ、清国輸出品を初めとした水産加工品の増産が図られていたということである。その文脈の中で、明治23年(1890)開催の第三回内国勸業博覧会に出品された「鱧延縄漁船雛形」、ないしは、近い時期に制作された「山口県改良鱧縄船」雛形が、北海道の水産業拠点である函館に、先進技術としてもたらされたのではないかと推察されるのである。



「漁船模型」付属資料の3丁の長腕櫓



北海道大学水産科学館保管の明治期鱧延縄漁具

[参考文献]

- 石井謙治 1995 『ものと人間の文化史 76-1 和船 I 』法政大学出版局
- 織野英史 2001 「もう一つの継櫓」『民具研究』第 127 号
- . 2002 「櫓の形態差と職人」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第 15 号
- 第三回内国勸業博覧会事務局 1890 『第三回内国勸業博覧会褒賞薦告文』
- . 1891a 『第三回内国勸業博覧会第四部審査報告』
- . 1891b 『明治廿三年 第三回内国勸業博覧会審査報告摘要』
- 第二回水産博覧会事務局 1897 『第二回水産博覧会審査概評』
- . 1898 『第二回水産博覧会褒賞人名録』
- 大日本水産会 1890 『大日本水産会報告 号外』
- 第四回内国勸業博覧会事務局 1895a 『第四回内国勸業博覧会授賞人名録』
- . 1895b 『第四回内国勸業博覧会審査概況』
- . 1896 『第四回内国勸業博覧会第四部審査報告』
- 田村勇 1990 「櫓の歴史と文化」『海の民俗』 雄山閣
- 二野瓶徳夫 1981 『明治漁業開拓史』平凡社
- . 1999 『日本漁業近代史』平凡社
- 農商務省農務局 1884 『水産博覧会 第一区第一類 出品審査報告』
- . 1899 『第二回水産博覧会審査報告』
- 農商務省水産局（編）1983（1911）『日本水産捕採誌（復刻版）』岩崎美術社
- 農商務省水産調査書 1896 「日本漁船調査第一報」『水産調査報告第四卷第三冊』
- 北海道庁 1892 『北海道物産共進会報告』
- 宮本常一 1976 『私の日本地図 壱岐・対馬紀行』 同朋社

他に

「水産陳列場物品目録」市立函館博物館保管

「水産陳列場重要書類」市立函館博物館保管

「漁船改良丸の好果」『山陰新聞』明治 27 年 1 月 14 日

所属：萩博物館 副館長・統括学芸員

E-mail アドレス：1177@city.hagi.lg.jp